

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 67 号

2008年12月



霊山自然林観察会

11月30日（日）に霊山自然林観察会を実施しました。今回は遠く石巻からの御夫婦も含め18名の参加者でした。

登山口の切り株には、オシャグジデンダや、オウレンシダ、イワトラノオが着生し、植生の豊かさを感じさせます。ミズナラ林に拓かれた広い山道では果実を着けたムラサキシキブに心が和みます。最初の本格的な岩場である屏風岩付近では、エビの尻尾に似たエビゴケや傍らを流れる沢周辺に発達したスズタケの群落など、今までの観察会では見たことのない植物が処々に現れます。頭上で振り子のように揺れるサワシバの果実を眺め、路上に眼をやるとアズキナシの赤い果実などもチラホラ。この時期ならではの楽しみです。

尾根に出ると展望が開け、岩だらけの山稜の先に阿武隈の山並みが広がります。視点を下ろすとヘリポートを備えた林道が目を引きます。山火事の際に海水を運搬するヘリコプター用の設備で貯水池も整備されているとのこと。防災林道とやらの名目らしいですが、維持管理にどのくらいかかるのか……。あきれる思いで眺めました。幹の皮目が人間の顔のように配置された人面幹や異なる岩石で構成され造山運動の営みを今に残す岩など観察ポイントは豊富です。

イタヤカエデの壮木が立つ分岐を折れ、護摩壇を經由して国司館跡に到着しました。国司館跡では芋煮を楽しみました。天気予報に反して、当日は風がとても冷たく、冷え込む中での昼食でしたが、寒さが芋煮の味をより一層引き立ててくれました。



100 回記念「高山自然観察会」に参加して

安積 幸子

幕川温泉からスカイライン経由の登山道は、コミネカエデ・ハウチワカエデ・コハウチワカエデの赤、イタヤカエデ・ミズナラ・ダケカンバの黄、クロベ・コメツガ・高山が北限のシラビソの深緑と、まさに自然豊かな錦織りなす美しい秋の色でした。

水質日本一の荒川へと流れゆく幕川の水源地・鳥子平から、オオシラビソの森の中、テレビの反射板のある高山山頂へ。山頂には麦平方面から登ってきた登山グループもあり、賑やかでした。

高山の会は、麦平を大勢で歩くと湿原を傷めるとのことで、ピストンで鳥子平経由幕川温泉へ下山。（なるほど、高山の原生林を守る会）

下山途中、きのこがあればお土産にでもと思い、ビニール袋をポケットにしにのばせていましたが、残念というべきか幸いというべきか収穫なし。そこで、せっかくのビニール袋に、途中で見つけた健康ドリンクの空きビンやプラスチック片、あめの袋等拾ったゴミを入れながら下山。観察会のしおりをよく見れば、「植物採集はしない」との注意書きがあり、きのこがなくて幸いでした・・・もちろん、「高山の原生林を守る会」としても、途中で気づいた外れた樹木の銘板や川の中の落下物等を回収しながら下山。

あまりの紅葉の美しさに幕滝まで足を伸ばし、紅葉の中、白い水しぶきとなって流れ落ちる幕滝の景観を楽しんだ 100 回記念の観察会でした。



黄葉のブナ古木



幕川周辺の紅葉



ブナ林帯を登る



枝を手にして詳しく観察

風景印の旅（4）

鎌田和子

市立図書館で調べものをした帰りに、稲荷神社によってアラカシを観察しました。「風景印の旅(3)」で、ドンダリのならないカシの木だという宮司の説明に納得できない私は、自分の目で確かめることに決めたのでした。今回がその初めての観察なのです。

長い穂が垂れて、雄花が咲いているのを観たのは4月下旬ごろ。枝先に雌花も出ていたのですが、私の視力では雌花を見つけることはできませんでした。今日は5月19日。若葉は、アラカシらしい幅広い葉に生長していました。見上げると、枝の上部にドンダリがついているではありませんか。「な～んだ、ドンダリがなってるじゃないの!」と、声を出してしまいました。あっさり疑問が解決して拍子抜けの感じです。でも、それは生まれたばかりの、まだ小さなドンダリの赤ちゃん。この先、無事に生長し、立派なドンダリの堅果を地上に落とすのを見届けるまではなんとも言えません。結論を出すのは早計というものでしょう。そうそう、青くて小さな可



① 5/19の果実

愛いドングリを写真におさめなくてはと、携帯電話のデジカメでパシャッ！

これから秋まで、どれくらいのペースで観察していくのがいいのかな、観察日記をつけるのもおもしろいかも、などと思うのでした。(2008. 5. 19)

その日以来、時おり、思い出しては稲荷神社に立ち寄り、アラカシのドングリの生長を観察しました。目に見えてドングリが大きくなっていくことを期待しましたが、そう簡単には行きませんでした。6月の半ば過ぎに観たときの果実の大きさは、5月のときのとあまり変わりません。観察日記をどう書けばいいのか、お手上げでした。しかし、それは正確な観察をしていなかったからなのです。アラカシの樹の下に立ち、私の目に止まった果実を、ケータイのカメラの届く範囲で写真を撮ったにすぎないのです。それに、毎回、同じ枝の果実を写したという確信はないのです。そのことに気づきましたが、後の祭りです。

それでも、約半年間、私なりに果実の生長を捉えたつもり写真、今改めて眺めてみると、おもしろい発見がありました。5. 19の写真①にはドングリの赤ちゃんがいっぱいついていて、8. 26の②にはドングリの形をしたものは2個しかついていません。えーっ、いつのまにドングリの赤ちゃんが消えたの？と思いながら写真をもっとよく見ると、枝の下側についている1個は生長がストップした感じです。9. 22の③ではもう明らかです。やっぱり、果実の全部がドングリの堅果になるのではなかったのです。私はドングリの実が大きくなっているかどうかばかり気を取られて、果実の数が減っていることを不審に思わなかったのでしょうか。目先の興味・関心に走って、アラカシの果実の本当の生長の姿を観察していなかったということになります。



② 8/26の果実



③ 9/22の果実



④ 11/12に見た冬芽

です。常葉の樹とはいえ、一瞬も休むことなく活動が続けるアラカシの凄さを見た思いがしました。そのまま、しばらくの間、「ふっくらした緑色の冬芽」のいっぱいついたアラカシを見上げていました。

さてと、次は足下に落ちているドングリを拾うことにしました。じいっと目を凝らすと、アラカシの殻斗も見えてきます。砂の色と似ていて見つけにくいので、まるで宝探しのような気分です。と、幾つめかに拾った殻斗の枝に、小さな殻斗が二つもついているではありませんか。小さな小さな二つの殻斗。それはきっと、あの未熟のまま生を終えた果実の殻斗にちがいありません！生を終えたのではなく、自分の役目を一つの果実に託したと考える人もいるでしょう…。種の命を守る殻斗はこんな小さいうちから堅いことを知りました。と同時に、小さな殻斗の頑張りを感じて、またも自然界の神秘にこころ打たれるのでした。

春先、福島の中街にアラカシの高木を偶然見つけました。その古木は、私に「照葉樹観察の旅」を強いたのです。幸運にも、その旅は半年後に念願の「アラカシの殻斗」⑤をもたらしくれました。手のひらに載せ、飽かず眺める、そのアラカシの殻斗は、あのウラジロガシの殻斗と、形も色合いも微妙に違うことを感じて私は満足したのでした。(2008. 11. 21)



⑤ アラカシの殻斗と堅果

高山の原生林を守る会 2008 年定期総会

2008 年 11 月 30 日 (日)
場所 虹彩館

2008 年活動報告

2 月 3 日	自然観察会 (土湯不動湯周辺)	2 5 名
4 月 2 7 日	自然観察会 (蟹ヶ沢)	1 5 名
6 月 8 日	植林ボランティア・龍ヶ岳観察会	2 1 名
6 月 2 2 日	福島県自然史博物館設立協議会総会	1 名
6 月 2 9 日	西吾妻ロープ補修ボランティア (事前調査)	1 名
7 月 6 日	西吾妻ロープ補修ボランティア (2 コース)	1 1 名
8 月 2 日	西吾妻ロープ補修ボランティア	2 名
8 月 2 4 日	吾妻谷地平観察会 (雨天中止)	
9 月 1 3 日～1 4 日	第 29 回東北自然保護の集い (宮城県大崎市鳴子)	1 名
1 0 月 1 3 日	西吾妻ロープ補修ボランティア	2 名
1 0 月 1 9 日	自然観察会 高山	1 5 名
1 0 月 2 2 日	福島森林管理署に申し入れ (高山周辺の表記等)	1 名
1 1 月 3 0 日	総会・自然観察会 (霊山)	1 8 名

2008 年会計報告書 (11 月 3 日現在)

収入の部

科目	予算額	決算額
前期繰越金	83,856	83,856
会費	40,000	56,000
観察会参加費	34,500	25,800
書籍販売	0	0
カンパ	0	28,842
謝金等	110,000	0
その他	0	120,000
		76
合計	268,356	314,574

平成 20 年決算額 110,118 円 (次年繰越金)

支出の部

科目	予算額	決算額
会議費	10,000	1,200
郵送費	30,000	29,780
観察会経費	10,000	1,750
交通費	20,000	36,500
苗木購入費	45,000	36,394
ロープ補修資材費	-	66,910
保険代	35,000	31,200
渉外費	20,000	0
雑費	30,000	722
予備費	68,356	0
合計	268,356	204,456

2009 年自然観察会計画

回 数	期 日	場 所	テ ー マ	担当
第 102 回	2 月 8 日 (日)	雨乞山	公設の自然観察道整備と冬の里山	奥田
第 103 回	4 月 26 日 (日)	浪江室原不動滝のウラジロガシ林と高太石山	早春の照葉樹林と広葉樹林を散策します	山内
第 104 回	6 月 21 日 (日)	西吾妻山	ロープ補修ボランティアと初夏の高山植物	高橋
第 105 回	8 月 23 日 (日)	達沢不動滝	安達太良の水系に残る自然林を訪ねます	山内
第 106 回	10 月 18 日 (日)	中吾妻山	人工林の現状と残されたブナ林の紅葉	高橋
第 107 回	11 月 29 日 (日)	千貫森と天井山	町おこしに利用された山の自然・総会	鈴木

鹿狼山から7 ～鹿狼山のオトコヨウゾメ～

小幡 仁子

鹿狼山に植生する樹木や花々の変化がおもしろくてここ3年くらい、カメラを片手に通っている。月平均2, 3回、年に30回くらいになるだろうか。それでも期間が開くときもあるから、四季折々の植物の姿をつぶさに捉えるところまでは至らない。

さて、オトコヨウゾメは早くから気になっていた樹木である。気になってはいたけれど、始めのころはたいした図鑑も持ってはおらず、この花の名前を長い間知らずに過ごしていた。名前が分かったのは観察会のときである。第82回の「水原地区、早春の観察会」のとき、笹森山の急斜面を登っていたら、鹿狼山と同じこの木があった。そしたら、会員のSさ



開花前 4月29日



開花 5月12日



色づく実 9月9日

トコというけれど、食べてはおいしいなあ。などと考えていると、植物の名前ひとつとっても奥が深いものだと思われた。

オトコヨウゾメの花は可憐で美しいが、花が終わると枝豆を小さくしたような緑色のつやつやした実を付ける。その実は少しずつ少しずつ色を変えていくのである。黄色みを帯びたオレンジ色になったときは感動を覚えた。この実が真っ赤になる頃、鹿狼山も紅葉の季節を迎える。その後の冬枯れの里山も良いものである。

んが「これはオトコヨウゾメっていうのよ」と教えてくれた。へえ？なぜにこの可憐で美しい花を咲かせる木がオトコなのか？ずいぶん変わった名前だと思ったのである。

この樹木はそんなに太陽の光を欲しがらないようで、鹿狼山では登山道脇のコナラやケヤキの下に静かに白い花を咲かせている。樹高は2mくらいのものである。ガマズミの仲間だけど、あんなに固まって上を向いて誇らしげには咲かない。自己主張をしない花である。集散花序で、花はまばらである。ちょっとうつむき加減なのが風情があってなかなか良いのである。高山の会のKさんもこのオトコヨウゾメの花については、「雌しべが、マリリンモンローのお口のように、薄紅色で綺麗」と言っていた。ルーペでのぞくと本当にそうである。

ところで、私が住む相馬地方ではガマズミのことをヨツズミといって、子供のころはこの実をよく食べたものである。特に美味しかったという記憶はないが、よく熟すると甘酸っぱくて食べることができた。その頃はおやつと言えばサツマイモやジャガイモばかりだったからヨツズミの実の甘酸っぱさは子供にとっては特別だったかもしれない。

このヨツズミを中部地方ではヨウゾメというらしい。なるほどヨツズミとヨウゾメは音も似ている。図鑑でオトコヨウゾメを調べると、この実が食用に適さないので「オトコ」を冠しているを書いてあった。はあ、そうか。食べられないもの、美味しくないものには「オトコ」がつくのか。でも待てよ、

ナツハゼなどは別名ヤマオ



赤い実 11月24日

東北ブナ紀行（32） 奥田 博

岩手・秋田県境の真昼岳は以前にも紹介した。しかし岩手県境にはまだまだブナの森は残されている。その一つが真昼岳登山口にあった指標林である。以前から気になっていたのだが、笹峠で行われたカタクリの会観察会の翌日、真昼岳の帰りに訪れることができた。

62) 笹峠

観察会の資料とオリエンテーションのお話によれば、岩手の湯田とお隣の秋田を結ぶ峠は、白木峠、萱峠、笹峠、峰越（真昼岳と女神山の間）が使われていたらしい。この内、萱峠以外は歩く道が残されているが、白木峠も笹峠も車道が迫っている。今回、笹峠の「主要地方道花巻大曲線」の必要性を検証するのが目的のひとつだった。

笹峠の秋田側はスギが植林されている。その手前の岩手側には、太いブナが多く見られた。観察のメンバーで南に道を走ると、この周辺ではもっとも太いマザーツリーのブナがあった。この周辺には見事なブナが残されている。ここに将来道路を通す計画があるという。この大きなブナを見ていると、道路計画がボツになることを祈らずにはいられなかった。

コースタイム：新道行止り点（1時間20分）笹峠（1時間10分）新道行止り点



笹峠の大ブナの前で記念写真
(写真 大庭さん)

63) 指標林

今回訪れた指標林は、真昼岳から下山の途中に立寄った。瀬川陽子さんのガイドで訪れた。この林の中には道形が入り組んでいる。勝手に入り込むと出口が分からなくなりそうだ。もちろん道標とてない。

この周辺は昔、牧場であったらしい。やがて放棄されてブナ林を形成したという。木々は、まだ細くてツブの揃った二次林である。その中に太いブナが散見される。今回の見どころは、瀬川強さんが名付けたマザーツリー・ファザーツリーと最近折れたブナの大木である。マザーツリーに近付くと、それと分かる風格で現われた。周囲の細いブナを従えるようにスラリと端正な樹形を見せていた。樹齢は250年前後だろうか。周囲にはブナの実が、びっしりと敷き詰められていた。ここで昼食をとって、コーヒーを飲んだ。

その100m北にファザーツリーと名付けられたブナがある。こちらも見事で、確かに夫婦に見立てた瀬川さんの目の通り、樹形は似ている。近付くと太さも高さでも、少しマザーツリーよりも小さく見えたから、ネーミングは正しい。

踏み跡の無い斜面をたどり、昨年折れたといわれる大きなブナを目指した。そこには真っ二つに折れた見事な最期を見せるブナがあった。寿命か落雷か台風か、いずれにしても「大物の最期はこうあるべし」と思わせる見本のような折れっぷりであった。

コースタイム：指標林入口（1時間）マザーツリー（1時間）指標林入口



二つに折れた見事なブナ



笹峠



真昼ブナ指標林

オヤリハグマ (*Pertya triloba* キク科コウヤボウキ属)

コナラ林からブナ林にかけての林床に生育する多年草。植生域は茨城県、福島県、宮城県、山形県に限定されており、福島県はその中心に位置する。類似種には温度適性が寒冷地型のオクモミジハグマと暖地型のカシワバハグマがあるが、オヤリハグマはその中間の温度適応性を持つ。カシワバハグマは吾妻連峰では確認されていない。

葉は互生で、株の中間部に深く3裂する(種小名 *triloba* はこれを意味する)大型の葉が数枚、放射状に着生する。葉柄と葉身の長さはほぼ1:1である。葉縁には粗い鋸歯がある。初めてみた時は、西洋の騎士がこの葉の形に似た槍を持つ光景を映画か絵画で見たことがあるような気がした。

開花期は9月頃で、株の先端に円錐花序を形成する。分岐した花茎は基部の葉先が尖った卵形の包葉と少数の頭花で構成される。1つの頭花には1個の小花しかないのがオヤリハグマの特徴である。小花は両性の筒状花で多くのキク科が持つ舌状花は無い。花冠は白色で深く5片に切れ込み、各裂片はねじれるように反転する。雄しべは筒状に密着し雌しべの花柱を囲む。雄しべの葯は紫がかった褐色である。柱頭は筒状の雄しべから突き出て2裂する。柱頭の位置が葯より高いことに加え、雄しべの方が早く成熟する(雄性先熟)性質を持つので自家受精は困難な仕組みとなっている。受粉は虫媒であるが、小花の数を多くつけることがマルハナバチなどの訪花昆虫に存在をアピールする効果があるので葉面積が一定以上(100 m²程度)に達しないと花を着けないと言う。

オヤリハグマとカシワバハグマの雑種としてセンダイハグマが区分されたがオヤリハグマと同種とする見解もある。ともあれ、福島の気候風土に最適な植物であることを知るとオヤリハグマに何となく親しみを感じるのは郷土愛というものだろうか。



ルイヨウショウマ (*Actaea asiatica* キンポウゲ科ルイヨウショウマ属)

ミズナラ林からブナ林にかけての林縁や林床に生育する多年草。

葉は互生。根生葉はなく、茎葉のみ1、2個着生する。茎葉は大型の2~4回3出複葉である。小葉は先の尖った楕円形で葉縁は鋭い鋸歯がある。この大型の葉の形状がサラシナショウマに似ている(類葉)ことが名前の由来とされる。また見方によってはレンゲショウマの葉とも似ている。これら3種は葉裏の脈上の毛で識別できる。細毛がルイヨウショウマ、屈毛はサラシナショウマ、無毛はレンゲショウマである。面白いことに属名はニワトコを意味するギリシャ語でこちらは葉がニワトコに似ていることに由来するという。

花は総状花序でサラシナショウマやオオバショウマと比較すると極めて短い。また開花期も5~6月で夏以降に開花する他のショウマ類よりかなり早い。小花のがく片は4個が基本で開花と同時に落下する。花弁は4~6弁で開花後間もなく落弁してしまう。雄しべは多数あり花弁より長い。雌しべは花柱が無く、子房に飯粒のような柱頭が直接着生している。8月になると伸びた花柄の先に黒紫色の球形の果実が1個ずつ着き木琴のばちを刺し揃えたような形状となる。

2007年の幕川観察会で果実をつけた株に出会って初めてこの植物の存在とこの山域での自生を知った。花の時期が不明で花を見るのはたやすすくないだろうと思ったが、翌年、磐梯山でその花に遭遇することができた。これまで何度か経験した発見の連鎖である。種子と根茎で繁殖するにもかかわらず他のショウマ類と比較して吾妻・安達太良連峰での植生地は極めて少なく、また群落も小さいように感じる。開花時期や果実の色の変異(赤と白があるらしい)と合わせて謎が多い植物である。



第 102 回自然観察会案内：雨乞い伝説のある掛田の雨乞山へ

日時：2009 年 2 月 8 日（日）7：30～15：30

集合場所：小鳥の森第 1 駐車場 集合時間：7：30 参加定員：20 名

内容：雨乞い伝説のある雨乞山。旧い山頂には竜神様が祀られている。新しい山頂は展望が楽しめ、晴れば蔵王・吾妻・安達太良の展望台となる。杉林と雑木林の混在する里山で人と里山との関わりを考えます。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300 円） 申し込み：2 月 7 日（土）まで

＊ その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）

2009 年カタクリの会奥羽自然観察会計画

月 日	回数	自然観察会 のテーマ	観 察 地
1 月 18 日（日）	217	冬の廻戸	西和賀町廻戸
2 月 8 日（日）	218	雪の自然観察	西和賀町志賀来
3 月 22 日（日）	219	春を探そう	西和賀町川舟
4 月 19 日（日）	220	カタクリの里歩き	西和賀町無地内・廻戸
5 月 17 日（日）	221	夏椿と夏の渡り鳥	西和賀町白木峠
6 月 21 日（日）	222	新緑のブナの森	西和賀町真昼ブナ指標林
7 月 12 日（日）	223	ブナの森の滝巡り	西和賀町下前風景林
8 月 23 日（日）	224	和賀川遊び	西和賀町沢内和賀川源流
9 月 13 日（日）	225	秋のブナの森	西和賀町未来の森
10 月 18 日（日）	226	落葉とキノコ	西和賀町笹峠
11 月 8 日（日）	227	冬の渡り鳥	西和賀町錦秋湖
12 月 6 日（日）	228	初冬の森	西和賀町峠山



＊ カタクリの会は西和賀町で、自然観察会開催を目的とした会です。

＊ 会則、会費はなく誰でも自由に参加できますが、各観察会の一ヶ月前から電話でのみ受付です。

＊ カタクリ通信を偶数月に発行いたしており、希望者には年間千円で送付致します。

（郵便振込みをご利用ください…02350-5-38765 加人者名…カタクリの会）

連絡先：郵便番号 029-5512 和賀郡西和賀町川尻 41-72-15 電話&FAX0197(82)3601 代表：瀬川強

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】 今年、ゆがんだ森林保全や里山利活用の深刻さを考えさせられる場面が多く目に付いたように思う。■忘却のかなたとなってしまう森林生態系保護地域制度。わずかに残る広葉樹林が皆伐されてもものいわぬ森林環境税のおこぼれをもらっているだろう里山愛好家の無神経。大昔に計画した県道が圧縮財政で整備不可能となり、防災林道の名を借りて代替道路を整備する行政の無神経。「森を大切に」としたり顔でキャンペーンを繰り返しているのはその行政。そんな行政にすりよる自然愛好家の急増。■こんな有様で本当に日本の森は守られるのかと暗澹たる気持ちになる。行政なんてそんなものと知ったかぶりをきめることもできるが……。マスコミによる自然保護キャンペーンは全盛のように思うが、実はその魂は抜け殻になってきているのではないだろうか。■森を守りたければそっとしておいてあげるのが一番と思うのだが（MS 記）。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第 67 号 2008 年 12 月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間 7 時～9 時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500 円）を添えて上記まで

編 集：佐藤・奥田・鈴木